

勇氣について私なりに考えた こと

koberyo1

幼少の頃、「勇気を持って」とか、「自分に打ち克つ勇気をもって立ち向かえ」、と教え込まれた。

ところがである。そのような耳障りの良いキャッチフレーズを教え込まれはしたものの、肝心の「勇気」の中身については、サッパリ教えてもらえなかった。勇気とはどんなものであるか、理解しなまま育ち、今日にいたっている。

学校の先生から、あるいは塾の教諭から、ひよっとしたら父親から、そのような話を聞いていたのかもしれない。ただ聞いていたにもかかわらず、右の耳から左の耳へと抜けていったのかもしれない。聞き逃してしまったのか、とも思う。

小学校に入ってから、先生に叱られても泣かずに我慢したのが、いま思い返すと勇気について理解した一番最初だったように思う。それから少しずつではあるが、自然とわかるようになってきた。

自転車をコマなしで乗る勇気、友達を大切に作る勇気などがしだいしだいに芽生え、湧くようになってきたが、これなどは実践してみると非常にむずかしい場合がある。意識して行うものではなく、自然に行動してあらわれれば、それに勝るものはない。

小学校のクラスメイトに山崎くん、というお金持ちの坊ちゃんがいた。思い出すのも嫌だが、彼は田川水泡の漫画「のらくろ」を持っていた。当時、田川水泡は絶大な人気を誇っていて、わたしはどうしてもそれが読みたくてしかたなかった。だが山崎くんは、わたしが貧乏だという理由で家に入ってくれるな、と言う。それでも「のらくろ」が読みたい一心で、どうにか勇気をふりしぼって頼み込んだ。本を貸してもらったはいいが、門の前で読めという。わたしは屈辱をしのびながら、それでもわくわくしながら読んだ。これはまあ、勇気にまつわる苦い思い出の一つではあろう。

それから孤独や陰口に堪える勇気もあるだろう。また風が欲しかったのだが、貧乏だから買うことができなかった。これなどは「欲望を延期する勇気」だろう。それから少しずつ物の道理がわかってきたわたしは、「貯金箱に貯金する勇気」を持てるようになったし、小学生の高学年になってからは、「両親を助ける勇気」を行動に移すことができるようになった。

勇気はけっしてスローガンとはなりえない。実行したいと言う素直な思いやヒラメキがあって、はじめて生命をもつのだ、と小さい頃のわたしは発見し、学んだのである。

できなかった鉄棒の尻上がりが何度も挑戦してできるようになったのも、この頃のことだ。勇気に生命が宿ることで、わたしは自信をもって取り組めたのだ。「諦めない」とは痩せ我慢ではなく、勇気に生命が通じた状態なのである。生きることそれ自身が、死ぬまで「諦めない」勇気なのだ。

だからこそ、勇気とは命尽きるその日まで、自己を自分自身で育てることでもあるのだ。これを基本にどこまでも勇気を貫き通す実行力が大切である。

近年、勇氣という言葉が死語になりつつあるのを淋しく思い、それではいけないとこの文章をしたためた。